

〈エリアーデ氏の逝去を悼む〉

エリアーデの学問と世界

荒木美智雄

四月二十八日、シカゴ大学のロックフェラー・チャペルは、弟子たち、友人たちをはじめ、大学全体の様々の学問のジャンルの人々、アメリカ中から集まった満場の人々でうめられ、ソル・ベロー、ポール・リクール、ジョセフ・キタガワ、チャールズ・ロングなど著名な学者たちが、ミルチア・エリアーデの追悼文を読んだという。ロングは、『エリアーデ』はルー・マニア語で『太陽の光』を意味する。その『偉大な太陽』がわれわれから去ってしまった」と述べた。

四月二十二日早朝、エリアーデ先生が亡くなられ、訃報を伝える長距離電話が、シカゴ大学留学中の渡辺君を

とおして私の浅い眠りを破ったのは日本時間の二十三日の午前五時半であった。すでに十九日に心筋梗塞の発作で入院され、重体であって、覚悟をしておくようにという電話をその二日前に受けていたものの、その強い衝撃に暫く茫然自失であった。

数年前から時折、極く身近の学生たちには、「アイ・アム・ダイイング」ともらされ、その日が来ることを恐れることがあった。しかし、先生のマグナム・オーパス（畢生の大事業）である「世界宗教史」が完成するまでは、あるいは、その完成の後に書き下ろされるべき「世界宗教史」の凝縮版が出されるまでは、少なくとも先生の使

命が終わらないのだからと、われわれ誰もが考えていたのである。われわれは彼の存在をあまりに当然のこととしてしまっていた。

エリアーデには多くの人が強い影響を受けた。ポール・ティリツヒやポール・リクールだけではない。宗教学全体が、そしてその関連領域の諸学問全体がその学問によって大きな展開を促された。彼が西洋全体に支えた、そして与えるであろう影響は予想がつかないほど大きい。私の場合、アメリカ留学中にそれまで研究していた、ドイツ観念論哲学の宗教哲学から宗教学(History of Religions)へと自分の学問の領域を大きく転換させたものはエリアーデの一連の著作との出会いだった。その転換を励まして下さったのが武内・キタガワ両先生であった。

一九〇七年、ルーマニアのブカレストに生まれたエリアーデは、ブカレスト大学で哲学を学んだあとインドのカルカッタ大学に留学し、第二次大戦後パリ大学ソルボンヌ高等研究所の宗教学の講師をしながら、『宗教学概論』を書いている。そこで打ち立てた独自の宗教現象学

は世界の学界から注目を浴びることになる。エリアーデの宗教学は、現象学的エポケーによって具体的な宗教現象の中心的構造を明らかにする。それによって、とるに足らぬと従来見捨てられてきた多くの現象が、それぞれに人類の宗教の普遍的な地平をあらわにする。そこには、それまで主として西洋哲学思想とそのカテゴリーから宗教を理解している者には全く想像も出来ない、広大で深淵な宗教的世界が広がっていた。

エリアーデの宗教現象との取り組みは、それ自身が一種のアルカイック・オントロジーである。エポケーをとおしてアプローチすることによって、神学的なもの、イデオロギッシュなもの、すべてを超えて現象そのものに迫るとき、われわれの宗教理解、世界理解そして、生そのものを更新することになる。そこには古い自己の死と新しい統合的生の開示がある。

たとえば、その代表的なものの一つは、エリアーデの神話研究である。彼の神話研究の焦点はコスモゴニーであるが、彼は神話研究を神話の定義から始めないで、創

世神話が生きられている文化・社会にその神話の宗教経験の意味を問うた。エリアーデのその視点からすれば、西洋の中心的神話であるホーマーやヘロドトスの神話は軍人や封建貴族の退屈しのぎのために語られたものであり、神話の宗教体験の理解に何の助けにもならないのである。エリアーデは西洋の神話ばかりでなく、その上に建てられた西洋の諸学問のカテゴリーが宗教理解に関して、ほとんど役に立たないとする。

エリアーデのそのような確信が基づいているところは、彼の三十代半ばまでの生が営まれたルーマニアの文化社会状況であり、そこで、彼が取り組んだ諸問題である。

エリアーデは自分の学問のすべてのテーマはその間にルーマニアで、ルーマニア語で書かれていると語った。西洋文明の中心から送り届けられる新しい文化・文明の力に、周辺の国ルーマニアの文化・社会は世代間に分断された。そして、第一次大戦中に青少年期を過した彼の世代は、その前後の世代と違って、既成の理想やモデルをほとんど持っていなかったという。しかし、若いころから、エリアーデはバラバラに分断された世代の間、文化

の間を仲介することを自分に課していたという。彼と彼の仲間には西欧の文明からもルーマニアの地方的偏狭からも自由になるために、「世界中に起きていることを知らねばならない」とも考えていた。そして、ルーマニアに危機をもたらしている近代西欧の、そのルーツとなったイタリア・ルネッサンスの哲学を研究し、近代の危機を克服することを考えていた。

エリアーデが二十一才でインドのダスグプタに師事するようになった背景には、周縁的存在の全体的人間への、そのような追求があったのである。インドでエリアーデは古典的な宗教の伝統やヨーガも学んだ。しかし、インドにおけるエリアーデの、最大の発見は、原初的なものの、宇宙的宗教、あるいは、宇宙宗教的感情である。それはまさしく西洋の宗教と文化の伝統が昔から切り捨てて来たものである。そして、それはルーマニアの民衆宗教をはじめ、多くの非西洋世界に存在している普遍的な宗教性なのである。そこから見れば、西洋の文化をはじめ、諸々の歴史宗教の普遍主義こそむしろ歴史的・文化

的に特殊なるものとなる。それ以来、エリアーデは、東洋とアルカイックな諸文化・宗教をはじめ人類史の諸々の伝統との対話をおして、そこに生きられている宗教の世界を再発見することによって、同時に西洋に警告を発し続けたのである。つまり、ルーマニアに於いて分断された世代・文化の間を仲介しようとしたエリアーデは、世界との関わりにおいては人類の再統合をめざしていたと云うことができるのである。

彼は将来、世界全体が西洋化され、一つの生き方しかできなくなることにそれ自身シリアスな危機であるがーを予想して、その時のために、今人類の多様な宗教的可能性を理解追求することを説いていた。私は一九六七年から十年間シカゴ大学で氏に学んだが、いつも学生に向かって、「私を研究するな。現象とじかに取り組み現象に即して、統合的・全体的な理解にいたれ」と教え、さらに一層多様な宗教的存在様態を追究することを求めた。

人類の宗教の全体的理解を求めたエリアーデは結婚後も、一日最低十三時間を仕事にあて、夜シカゴ大学図書

館に出没する「幽霊」と間違えられたり、「最後のマエストロ」と呼ばれることもあった。発作に倒れた十八日の日も、エリアーデは、「世界宗教史」第四巻と「自叙伝」の執筆に一日を過し、その後ルーマニアの哲学者チオランの哲学書を読んでいたという。

第二次大戦末期の政変で亡命したエリアーデは一度も母国に帰ることなく、永遠の始源のパラダイスへのノスタルジアの中に異郷の地で逝ってしまった。

宗教学の、われわれの「偉大な太陽」は逝ってしまった。しかし、彼が限りなく魅せられたアクシス・ムンディ（宇宙軸）の象徴、永遠回帰の神話、その他人類の多様なシンボリズムは世界中に、今も、最も近代化、西洋化された時間・空間の中にも生きている。

（あらきみらお・筑波大学助教授）